平成29年度　第２回地域福祉専門部会会議録

日　時	平成29年12月20日（水）13：55～15：45
場　所	市役所４階　講堂Ｂ・Ｃ
出席委員	井戸 静志、松坂 めぐみ、桟敷 学、松原 由佳、後藤 敏雄（代理出席） 芳川 マツコ、徳田 マスエ、新田 英子、津野 章、田邨 真紀夫 以上10名（委員名簿順、敬称略）
欠席委員	佐々木 千歳、西川 美高、河野 好政（敬称略）
事務局	（浜田市健康福祉部地域福祉課） 課長:原田 政美、係長:中谷 美代恵、主任主事:岩田直樹、臨時職員:山藤明利 （㈱ジャパンインターナショナル総合研究所　中国支社） 永野 侑（敬称略）
会議内容	1　開会（地域福祉係長） 2　地域福祉専門部会長あいさつ 3　報告事項 ・アンケート調査報告書（案）について ・中学生対象アンケート調査報告書（案）について ⇒事務局より、報告事項資料№1～№2について説明。 【委員からの質問・意見】 （委員）アンケート調査報告書の内容だけではなく、前回の調査内容と対比しての説明であり、違った捉え方が出来たのは良かった。 （委員）社協でも地域福祉活動計画の策定の準備を進めている段階で、行政の計画と整合性を持って、アンケートについては共有させていただければと考えている。聞き取りやアンケートの中で、やはり支え合いがキーワードとなっている。気軽なボランティアというか地域に住むものとしての支え合いが自然に出来るような、大きく言えば福祉教育だが、そういうことを考えている。そのような点を社協だけでなく、横のつながりで考えていくことが大切である。 （委員）アンケート調査の中で、近所付き合いが希薄になっているとの説明が何度かあったが、その様な状況の中でも、中学生アンケートの「地域の支え合いについて」という設問の中で、中学生から「地域の助け合いが大事」、「自分も役に立ちたい」という意見が少数ではあるかもしれないが出ているので、何らかのきっかけづくりが必要であると、報告書か

らはうかがえた。

（委員）集落の中で小さい子どもから一緒に受け入れて育てていくというのが昔は見られたが、それが難しくなっているのが現状ではないか。

（委員）中学生アンケートについて、学校区があって、それぞれの地域性が回答には表れている。助け合いや支え合いについて、街中よりも郡部にいくほど関心があるということで、もともと育っている環境がそういう地域であるのかというのを鑑みる事ができた。また、一般の調査で100人が100人とも違う意見を持ち、それぞれの問題点が切実に自由意見でも挙げられているので、それをどのように捉えていくのかが課題であると考える。

（委員）ボランティア活動への参加や地域での助け合いのきっかけづくりについては、修学前の段階から、地域の活動やボランティア活動に参加する機会がないと難しいのではないかと感じる。

（委員）中学生アンケートで「将来浜田市に住みたいか」という設問に対する回答として、住みたいと回答した生徒が 18%、住みたくないと回答した生徒が 26%おり、住みたくない理由についてもアンケートで質問できれば良かったのではないか。今回アンケート対象となった中学生世代の動向というのが、浜田市の福祉に限らず地域活動の将来を考えていく中で、論点になってくる。

4　議事

・地域福祉計画（素案）について

⇒事務局より、議事資料№1について説明。

【委員からの質問・意見】

（委員）P32で生活困窮者についての項目が今回新たに盛り込まれている。その中で、「自助」の取り組み内容として「生活困窮者自立支援事業について把握します。」とあるが、一人ひとりが努力することとして適切であるのか。

（事務局）市民に制度自体を理解していただく必要がある。計画を推進していく中で、制度の恩恵を受ける方だけが理解するというのでは不十分。制度の仕組みを知っていただかないと、行政や関係団体が進めていく事業に対する理解が得られない。そのような背景から、「自助」の取り組み内容に記載させていただいた。

（委員）取り組み内容として「把握します。」という書き方が、適切であるのか疑問に感じた。

（事務局）生活困窮者についての項目だけではなく、他の項目についても「自

	助」の取り組み内容については「把握します」という表現を用いている。表現方法については、事務局で再度検討させていただく。 （委員）社協が生活困窮者の支援業務や安心相談窓口など一層、二層などいろいろ知恵を出しながらされている。この施策について社協が地域福祉活動計画に載せていくと思うが、もっと噛み砕いた計画が立てられていくものだと思う。この計画は自助・共助・公助について住民が身近に感じられる言葉ではない。もう少し分かりやすいよう実際地域でサークル活動をしている方に理解してもらい、4、5 人でも 10 人でもいいので助け合っていくことをやってもらわないといけない。障がいのある人は自分たちは障害者年金をもらっているからそれでいいという考え方ではなく、地域活動へ参加していただくことも大事だと思う。地域で生き続けるために隣近所で助け合う、できることをできるときにみんなで一緒にやっていくことが大切。 （委員）単数ではなく、複数の方の協力が必要。各当該担当課と遂行関係、取組例などより具体性を持ち、チェックリストなどを用いて、完遂した、終了したなど、完成度を上げてほしい。各課がどの程度進捗したか、その辺りがわかるような計画性持って行ってほしい。 （委員）P21 幼児期からの福祉意識の醸成について、保護者は子どもに連れられて行事に参加ということが多い。積極的に連れていくことが大切だと改めて感じた。また、ネーミングとして他人事から我が事としてというのがとても身近に感じられた。 （委員）浜田市の福祉計画と社協の活動計画は同じような感じがする。市として社協と違うことはあるのか。 （事務局）浜田市が策定する「地域福祉計画」は動くためのガイドラインとしての計画、社協が策定する「地域福祉活動計画」は実際の事業を行なうための計画であると認識している。 （委員）「地域福祉計画」と「地域福祉活動計画」は車の両輪に例えられているが、「地域福祉計画」は行政計画で範囲が広く、実際の事業実施については社協の立場として、いろいろな機関、自治会や公民館もあるが、そこと連携して行っていく。P3 にもあるが、行政は子どもから障がい者、高齢者など色々な分野を統合して計画を作っている。この中の地域福祉計画と地域福祉活動計画が連携協働して行うこととしている。社協も地区版などもあり、広くはなっている。社協の計画では家に例えるなどして、玄関は誰もが入りやすい窓口を作ろう、縁側は誰もが立ち寄れる、相談できるような縁側を作ろう、居間はみんなが集まって何でもできる居間をつくろう、屋根はサービスや制度のことなどそういったしっ

	かりとした屋根をつくろうなど、家に例えて作成していくことを考えている。必ずしも同じものではなく、社協も色を出しながら作成していきたい。 （委員）自助・共助・公助の言葉がいい。みんなが意識してくれたらいいし、積極的に発信してほしい。 （委員）我が事や丸ごとなど新しい部分が出てきており、見た人に伝わりやすい、堅苦しくない表現で記載されている。前回の計画と照らし合わせて見たときに５年間で大きく変わることはないが、アンケートをとり、そこで変化が出てきたことに対し、この計画は市の計画なので見る人は公助を見ると思う。公助に期待感、魅力のある取組内容がもう少し具体的に書いてあると、福祉に関する取組がしっかりしている浜田市に住みたい、自分も協力したいという気持ちが芽生えてくると思う。福祉の現場で働く立場として、求人の有効倍率が島根県で 1.6％と出ていたが、求人を出していても人が来ない現状がある。そうなると本来提供するべきサービスが提供できない状況が出てきている。一方で、高齢化などの大きな課題がある中で、それに伴った支援ができていかないと現場も不安を感じている。事業所は事業所で魅力ある職場づくりを考えていかないといけないと思っている。 （委員）P17 の「市民を主役に　互いを認め合い　支え合うまち」とあり凄くいいと思うが、支え合うのもいいが、互いを認め合いというのがあり、一人ひとりが何かできることがあると思う。何も出来ないといってもできることがある。それを認めてあげることが必要。 （委員）資料編の空白については、何か続きが入るのか。現行計画では相談窓口の一覧があった。いろんな分野がある中で市役所にすべて相談にいくより、それぞれの専門機関に相談したほうが早い場合もあるので、それを入れていただきたいと意見したところ、入れていただいた。今回は空白なのでどうなのかと思ったが、専門機関を入れていただくことで、自助･共助･公助で非常にスムーズに困ったときにお互い様ではないが、すぐ連絡を取り、何か相談できる場があれば解決に向けた方向に進めることができる。相談窓口の一覧を今回もお願いしたい。 （委員）自助・共助・公助について共通して「ですます」調になっている。特に、自助のところが堅苦しいイメージがある。意識を持てもらえるような表現にしていただけたらと思う。 （事務局）表現については事務局で検討させていただく。 （桟敷委員）現行の計画に対しての実行、実施した後の結果がどうだったのか。自助は自分でやることだが、特に共助・公助の場合、計画を立てて

	どうだったか、そこが分からない。どこに進展があったのかわからないので、そのあたりが明確になるとよいのではないか。 （事務局）他の個別計画では数値目標や事業などを掲載しているが、地域福祉計画は全体の計画を包括するものであり、なかなか目標値という形で掲載するのが難しい部分がある。ただ、前回の計画からどのように変更したかについては、掲載しないといけない部分ではあったかなと思う。そのような部分をヒアリング調査で抑えられていない部分があったため、今回の計画ではその辺りを掲載することが難しかった。今後は策定の前段階からその点を考えて取り組んでいかなければならないと考える。委員から、チェック体制についての意見もいただいたが、担当者の人事異動等で引継ぎがしっかりできておらず、チェック体制が不十分であった。今回の計画策定においては進捗評価についてのチェックシートも作成しているので、今後はこれを活用し、チェック体制も強化していきたい。 （ＪＰ総研）チェック体制では、他の自治体でも出来ていない部分が多い。地域福祉計画が数値目標を立てづらい計画であることも要因としてある。実際評価している自治体では、計画でいう公助の部分が行政の取り組みであるので、この取り組みがどうであったかについて評価を行っている。共助については関係団体ヒアリングや社協の取組など色々な団体が進めている事業を記載内容に当てはめながら、評価・検証につなげていくことができると思う。チェック体制でいうと、専門部会で進捗状況を把握し、その内容を取りまとめ、検証していく。それを中間評価や次期計画の見直し時に現状の課題としてまとめていく、といった取り組みを行っている自治体もある。 （委員）P23 のボランティアの養成について、自助・共助・公助の中で一つわかりやすいのが公助の認知症サポーター養成講座、あいサポーター養成講座を開催し、参加促進を図りますとあるが、例えば認知症の方への支援として認知症のオレンジカフェが浜田市内の新町で毎月開催されている。人の参加も増えており、認知症の人と家族の会、代表も 20 年来活動されている方も市役所とそこが協働で開催されており、非常にうまく進んでいる。そういったことも市役所のわかる範囲で載せていただけると他の分野計画の中でも分かりやすくなる。 （事務局）掲載については事務局で検討させていただく。 （部会長）様々な意見があり、いくらか訂正があるかと思うが、計画については事務局の案でよろしいか。

	※この件について、了承された。 5　その他 6　閉会